

作品情報としての常設展目録:

美術館ウェブサイトとコレクション・データベースをめぐって

川口雅子

はじめに

国立西洋美術館は2004年以来、コレクションの情報をデータベース化するプロジェクトに取り組んできた。美術館が収蔵作品管理の重要な役割を担うものであることは言うまでもないが、その業務プロセスを情報通信技術 (ICT) によって支援するのが本プロジェクトのねらいである。また、各作品がこれまでどのような所蔵者を経てきたか (来歴)、どのような文献に言及されてきたか (文献歴)、どのような展覧会に出品されてきたか (展覧会歴) といった事柄について、できる限り網羅的に記録を作成し、内外研究者のアクセスを保証して、学術研究の発展に寄与することも目標としている。こういった記録の管理は、美術館ではコンピューターの導入以前からレジストレーションやドキュメンテーションの枠組みで実践されてきたことであるが、これをデジタルの環境に移し変え、情報社会にふさわしいものへと進化させることがこの構想の根本にある。

さらに本プロジェクトでは、こうした専門的な情報管理とあわせ、一般利用者のための情報活用も視野に入れている。とくにインターネット上でコレクションの情報を効果的に提供することは、美術館の情報戦略上、重要な意味を持つ。そこで、単なるコレクションの検索手段だけではなく、「その作品は今、観ることができるのか」という現実性のある情報を提供することに着目した。角度を変えてみれば常設展の情報を提供することに他ならないが、このことは、作品を収蔵し展示公開するという美術館の本分に深く関わるテーマである。

プロジェクトは2004年、それまで館内の各部門に分散していたデータベース群の調査から始まり、翌年にはデータ統合の受け皿となるコレクション・マネジメント・システムを導入するにいたった。システム導入の経緯や、デジタル画像活用の可能性を探ったプリント・オン・デマンド実験についてはすでに拙論に報告している^[1]。本稿はその後に進展のあった、常設展の作品情報のインターネット公開を中心に、あらためてプロジェクトの全体像を報告するものである。

1. 常設展の情報公開をめぐる状況

インターネットの普及と流通する情報量の爆発的増加は、美術館の広報や情報発信にも大きな変化をもたらした。とくに展覧会に関する情報は、美術館のウェブサイトで大きな位置を占めるようになっていく。トップページに開催中あるいは近日開催予定の特別展のイメージを配し、そこから展示の趣旨や構成、そして講演会やギャラリートークなど関連プログラムへと導いていく工夫が各館で行われている。そこでは、展覧会を構成する作品を紹介する

ため、おもな出品作品の画像を表示したり、作家名や作品タイトルを一覧にした棒目録を提供したりするのが一般的である。これによって利用者は、出品作家や作品を事前に確認することができ、展覧会への興味を喚起されることにもなる。すなわち特別展の出品リストは、インターネット上の訪問者の関心を惹きつけ、作品を鑑賞しようと美術館に赴ききっかけをつくる有用な情報資源の一つであるといえよう。

一方で、美術館の収蔵作品で構成される常設展は、十分な広報がなされていないという指摘がある^[2]。このことは、コレクションが充実するヨーロッパの主要美術館とは異なり、米国や日本の美術館では、集客に直結する特別展の方に事業の重点が置かれるという傾向と無関係ではないだろう。この帰結として、ウェブサイトを含む広報の主役は特別展であることが多い。

では実際、常設展の案内はどのように行われているであろうか。当館ではウェブサイトをリニューアルした2002年頃より、「常設展マップ」という名のもとで常設展の作品一覧を公開してきた。これは、インターネット用の独立したコンテンツとして作成されたもので、情報項目は作家名やタイトル、クレジット・ライン（例:「松方コレクション」）に限定されていた。作品画像などの詳細情報を用意していたのは、ごく一部の20数点にすぎない。それでもホームページ担当者は情報の鮮度を保つため、つねに展示替に目を光らせている必要があった。幸いにして当館の場合、展示替も少なく、情報を更新すべき箇所も限定されていたのでサービスを持続できていたが、更新の頻度が高かったり項目が多岐にわたったりしていたら、実際の展示と公開情報との一致を保ち続けることは至難であったに違いない。

他方、デジタル・アーカイブという語が注目を集めるようになって以来、画像データベース化や高精細画像デジタル化の対象とされてきたのは美術館が収蔵するコレクションであった。そこでの主な関心事は、美術館のコレクションにどのような作品が含まれているかという目録情報である。近年、個々の組織を越えた文化財情報共有の話題が注目されているが^[3]、やはりそれでも、どのような文化財がどの施設に存在しているかということが情報の中心となっている。これらの文化財データベースは、検索の方法や関連情報を連鎖していく技術に目覚しい進展が認められるが、利用者を美術館に誘う動機づけの点で特別展の情報と対照的である。というのも、検索結果として得られた作品が、現在どのような状態にあるか、博物館・美術館で現に鑑賞できる状態にあるかという情報にはさほど関心が払われていないからである。つまり美術館コレクションについて蓄積されてきたデータベースは、往々にして美術館のアクチュアルな展示情報とは結びつけられてこなかったといえよう。

このように、常設展の案内にせよ、美術作品のデータベースにせよ、いずれもコレクションを対象としている点では共通しているにもかかわらず、後者の美術作品データベースでは作品情報が豊富にあっても展示状況が伝えられていない反面、展示情報そのものである前者の常設展リストはデータベースとは無関係に担当者の手作業に委ねられているという不均衡な状況がある。これは今日、わが国の多くの美術館が抱えている共通の課題なのでは

ないだろうか^[4]。

2. 常設展とコレクション・マネジメントとの関係

収蔵作品管理システムの情報を活用することができれば、手作業によらずとも常設展の出品リストをインターネットに自動配信できることは容易に想像できよう。ただしそれを実現するには、美術館における作品情報のメンテナンスをコレクション・マネジメントという視点から捉えなおし、情報の入力・更新というデータベースの運用を行うことが必要である。

国際博物館会議博物館ドキュメンテーション委員会 (ICOM/CIDOC) が定めた作品記述に関する「博物館資料情報のための国際ガイドライン」^[5]や、英国博物館ドキュメンテーション協会 (MDA) がまとめた収蔵作品の記録管理に関する「英国博物館ドキュメンテーション標準 (SPECTRUM)」^[6]によれば、作品の所蔵場所を管理することはコレクション・マネジメントの基本事項である。米国博物館協会 (AAM) の伝統的なレジストレーションの方法論や、日本博物館協会が近年まとめた資料取り扱いの手引書にも同様の指摘がある^[7]。また情報技術の視点からも、博物館情報政策の専門家エリザベス・オルナが、コレクションの情報は単に何があるかというだけではなく、作品の現在の所在も管理する必要があることを指摘している^[8]。

これらの標準にしたがうと、収蔵庫に保管しているにせよ、展示室に展示しているにせよ、それぞれ下記のように具体的な室名や移動理由、移動担当者、移動日までを管理する必要がある。

作家名:クロード・モネ

作品タイトル:舟遊び

所蔵番号:P.1959-148

現在の所在:新館2階第4展示室

移動理由:常設展示

移動担当者:MK

移動日付:2008年1月1日

また、新しい所在を記録したら、それまでの所在データを消去するのではなく、過去の履歴も蓄積しておくことの有用性が論じられている^[9]。さらに収蔵庫の棚卸をするならば、下記のように所在場所ごとのリストも作っておく必要がある。

所在場所名:新館2階第4展示室

作家名:アルフレッド・シスレー

作品タイトル:ルーヴシエンヌの風景

所蔵番号:P.1981-4

作家名:クロード・モネ

作品タイトル:並木道 (サン=シメオン農場の道)

所蔵番号:P.1959-147

作家名:クロード・モネ
作品タイトル:雪のアルジャントゥイユ
所蔵番号:P.1959-150
作家名:クロード・モネ
作品タイトル:舟遊び
所蔵番号:P.1959-148

このような記録管理体制を確立することにより、個々の作品ごとの所在場所の確認はもちろん、所在場所ごとにそこに保管あるいは展示されている作品群を抽出することも容易にできるようになる。こうして、例えばクロード・モネの《舟遊び》を第4展示室で展示しているのならば、それが第4展示室にあるということだけではなく、同室にどのような作品があるかということが即座に確認できるようになる。そしてこのようなコレクション・マネジメントの基準に則ったシステムがあってはじめて、「所在場所=常設展示室」という検索条件で結果一覧を抽出するとき、常設展の出品目録を手にするができるようになるのである。

3. コレクション・マネジメント・システムの導入

国立西洋美術館は2007年、上述の原理に基づいて常設展リストを抽出し、インターネットに公開するシステムを導入した。ここでは本題に入る前に、前提となるコレクション・マネジメント・システムについて簡単に振り返っておきたい。

当館は2005年に、新しいコレクション・マネジメント・システムとしてパッケージ・ソフトウェア「Artize MA for Web (アルタイズ・エム・エー・フォー・ウェブ)」^[10]を導入した。それまでは館内の部門ごとに用途別のデータベースが作成されており、会計係は資産管理の台帳に相当するデータベースを参照し、学芸課絵画・彫刻室は絵画・彫刻・工芸データベースをもとにコレクションを管理し、同版画・素描室は版画・素描、書籍のジャンル別にデータベースを使用している、といった具合であった。またデータベースのコピーが別のスタッフの手に渡ることもあれば、データ項目や画像の扱いも部門ごとに異なっていた。しかし美術館の経営方針として、所蔵作品を活用した新しい情報サービスを展開していくことになり、幾つものデータベースが稼動する状況にさらに新しいものを上乗せするのではなく、統合的な基盤を整備することが決断され、本システムが導入された。

システムの導入に際しては、作品情報を活用したサービスの提供という大きな目標を二つの具体的な課題に落とし込んだ。一つは、これまでに述べてきたコレクション・マネジメント業務の支援である。上述のSPECTRUMなどの基準にしたがって、「何時、どこへ、何のために、誰が移動したか(日付、移動先、理由、担当者)」という所在情報を管理することとした。

もう一つは、さまざまな用途に活用するマスター・データの蓄積である。テキスト情報にせよイメージ情報にせよ、コンピューターのディスプレイに表示するだけでなく、カタログや絵葉書などの印刷原稿としても使用できる情報資源を蓄積することとした。この方針はデータの項目や形式に影響を及ぼす

ことになった。たとえば画像は、印刷用途に活用できる大容量のファイルを含めて複数登録することが必要で、ファイルごとに容量やフォト・クレジットなどのメタデータを管理できなければならないといったことである。

4. 作品データの統合

次に、新しく導入されたシステムの使用開始にあたって、分散していたデータをどのように統合し、新システムに移行したかという経緯について記したい。国立西洋美術館の所蔵作品は約4,500件である（2007年3月現在）。分散データベース群を調査すると、合計レコード件数が所蔵作品数と一致しないという状況であったが、旧システムで使用されていたデータは可能な限り全て新システムに移行することとし、この作業を数年間にわたって段階的に実施することとした。作業の大まかな区切りとして、なるべく早い時期にコレクションの全体像を掴めるデータベースを実現するため、まず作品番号、作家名、作品タイトル、制作年、技法・支持体、サイズ、署名・年記、クレジット・ラインなど基本となる最小限の項目のデータを統合することを第一段階の課題とした。データ・フィールドのマッピングとデータ分析は個々のデータベースごとに行った。各段階の作業内容は次の通りである。

4.1 基本情報

最初に取り組んだのは、絵画・彫刻・工芸分野のデータベースである。2004年当時、インターネット上で独立行政法人国立美術館4館の作品目録「独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システム」^[11]を公開することが決定し、当館も急いでまとめたデータを提供する必要が生じていた。

絵画・彫刻・工芸データベースは、1990年代半ばに最初に導入した美術情報システムに格納されていたデータを流用し、市販のデータベース・ソフトウェア「FileMaker Pro（ファイルメーカー・プロ）」で管理・運用していたものである^[12]。ここに格納されていたレコード数は約460件で、全てテキスト情報に限定され、データ構造は1作品1レコードの単一テーブルであった。

このデータベースからカンマ区切り（CSV）ファイルを出力し、データベース事業者への外部委託も適宜取り入れてデータのクレンジング作業を実施した。手間がかかったのは、欧文特殊文字の文字化けの修正と作家名の「名寄せ」作業である。フランス語のアクサンをはじめとする欧文特殊文字は「作家名」や「署名・年記」項目に多数使用されており、「FileMaker Pro」が統一文字コード体系Unicodeに未対応の旧版であったこと、Mac OS からWindowsへという異なるオペレーションシステム（OS）環境へのデータ変換であったことなどの複合的な要因によって、作業量が増えた。また作家名については、旧データベースがカード型の構造であったため、同一作家のデータが重複して存在してしまっていた。そこで1作家のデータを1件にまとめるため、既存データの比較分析から類似データの絞込み、同一データの確定といった作業を実施した。

画像データについては、プロジェクト開始当時、本館1階ロビーに設置されていた「デジタルギャラリー：超高精細画像検索表示システム」^[13]の画像を再

利用したが、主要作品の画像120点に限られていたため、さらにカラー・ポジフィルムやモノクロームの紙焼き写真からのデジタル化を外部委託により実施した。デジタル化は4 x 5インチ判のカラー・ポジフィルムをRGB・1,000dpiの解像度で分解・入力する仕様とし、アドビRGB準拠のカラー・マネジメントにより品質管理した画像ファイルをマスター・データとして登録した^[14]。こうして2004年12月までの間に、絵画・彫刻・工芸作品の基本文字情報と画像情報を「独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システム」に提供した。

館内ではこの作業と相前後して新システムのカスタマイズが進行していたが、2006年3月までにシステム設置の第一段階も済み、上記データの登録も完了した。システムはwebブラウザを用いたユーザーインターフェースを備えるもので、この新しい環境に絵画・彫刻・工芸作品データが移行されたことにより、それまでは部門ごとに分断されていた作品情報がネットワークを経由して館内の全スタッフがアクセスできる共有資源となった。

翌2006年度には、絵画・彫刻・工芸分野のデータに続いて、版画および素描、書籍分野のデータベースに着手した。それぞれ、美術館スタッフが「FileMaker Pro」で自作したデータベースであり、またデータ項目は絵画・彫刻・工芸データベースとも異なるものであった。この年に日本学術振興会の科学研究費研究成果公開促進費「国立西洋美術館所蔵作品データベース」を獲得することができ、外部委託も行いつつ和・英二ヶ国語の約3,500件のデータ整備を実施した。またデジタル画像ファイルの作成も前年度より継続し、約1,770件（カラーおよびモノクロ）をシステムに登録した。

これに引き続き、残りの分野（参考作品等）および寄託作品についてデータの整備とシステムへの登録を行い、2006年8月中旬に基本項目のデータを全件統合するという初期の目標を達成することができた。

4.2 詳細情報

基本データの統合が一段落し、次の段階では既存のさまざまな情報源に蓄積されている作品・作家解説文と来歴・展覧会歴・文献歴など、詳細なデータの整備を行っていくことにした。

作品・作家解説文は、当館刊行物の『国立西洋美術館名作選』^[15]や、版画素描展示で配布する棒目録^[16]などの紙媒体に掲載されており、また当館ウェブサイトや前述の「デジタルギャラリー」にもデジタル情報として蓄積されていた。一方、来歴や展覧会歴、文献歴は、当館がこれまで刊行してきた総目録や年報に記載があり^[17]、また旧ローカル・データベースにも登録されていた。このほか学芸課の「収蔵作品ファイル」には、書誌情報のかたちにはなっていないものの、作品貸出の際の展覧会カタログのコピーや掲載論文の抜き刷りなど、文献資料そのものが保管されていた。これらの多様なメディアのうち、何れにもっとも多く情報が蓄積されているかは、作品によってばらつきがあった。

2007年度は、まず作品および作家の解説を対象に、刊行物に掲載された情報のデジタル化と既存デジタル情報のシステムへの登録を行うこととし、外部資金により雇い入れた美術史専攻の大学院生など数名の研究補助員（ア

ルバイト)が作業に従事した^[18]。システムでは1作品に対して複数の作品解説を登録することができるため、出典を明示して、全ての情報リソースを集積した。

続いて刊行物に掲載された来歴と文献歴のデジタル化作業に着手した。書誌記述の形式は、原本により微妙に異っており、統一を図るために「科学技術情報流通技術基準 (SIST)」^[19]を参考にしたが、なかには西洋美術史研究の慣習とかけ離れた点もあり、便宜上、別途ルールを定めた部分もある。この書誌記述の問題についてはさらなる検討の余地がある。また総目録の版によって、文献歴に日本語の表記が全くなかったり、逆に邦語文献でローマ字化していないものがあつたりという違いもあつたが、本プロジェクトではデータ出力先の一つであるウェブサイトで日本語版と英語版を分けて表示するのを見越して、邦語・外国語文献を問わず、文献1冊に対して書誌レコード1件を作成することとした。和英のいずれかの表記が欠けている文献については、必要に応じて収蔵作品ファイルや国立西洋美術館研究資料センターの蔵書を参照し、表記を補った。こうした全てのデジタル化工程において、作業の従事者である研究補助員が大学院で培っている美術史の素養が生かされている。

一方、旧システムに登録された文献歴などのデジタル情報については、これまでと同様、データベース事業者への外部委託によってクレンジング作業を行った。変換後のシステムへの登録は、重複も多いことが予想されるため、作品分野によってはデータの有無を一つ一つ目視で確認しながら手作業で行う予定である。

こういった詳細情報の登録作業と平行して、ポジフィルムからの画像デジタル化作業も継続して実施した。版画等の1,600件の新規作成・登録を行い、あわせてホームページ掲載サイズに調整するため画像トリミング・変換作業などを行った。

来る2008年度には、展覧会歴のデータ入力を予定している。また収蔵作品ファイルに収められている各種資料に関する書誌情報のデジタル化はこれからの検討課題である。収蔵作品ファイルに掲載記事の切抜きやコピーを集積する作業は将来にわたって継続していくものであり^[20]、増える一方の文献の採録基準やそのデータ入力体制については、学芸課の担当部門と議論を重ねていくことが必要と考える。

5. 作品所在データの管理

一般に美術館の建物のリノベーションは、収蔵品の大幅移動を伴うため、コレクション・マネジメントを旧体制から新体制へと再構築する一つのきっかけとなることが多いようである^[21]。当館においても、30年前に竣工した新館(1979年竣工)の設備改修工事を2007年から2009年にかけて行うことになり、これに伴い、収蔵作品の移動をすることが決まった。このため、必然的にコレクション・マネジメント体制の立て直しを図ることになった。

作品の移動準備として、まず2007年2月に絵画・彫刻などの部門に関して総合的な棚卸・所在調査(悉皆調査)を実施した。その際には、導入された

コレクション・マネジメント・システムを使用して「Microsoft Excel (マイクロソフト・エクセル)」形式で作品データを抽出し、作業用リストを作成した。現場ではこの作業用リストに所在場所や日付を書き込み、作業後にまとめてデータのフィードバックを行った。こうした過程を経て、現所在データなどの基本要素が概ね揃った。その後に実施した作品梱包作業、搬出作業においては、コレクション・マネジメント・システムが業務プロセスを支援する体制が動き始めている。

美術館の組織のなかで、システムの構築・管理（ハード面）やデータの作成（ソフト面）をどの部門の誰が担当するかということは、館の規模の大小を問わず問題になることであろう。諸外国では、作品の記録管理を伝統的に担当してきたレジストラが、その職務上、データベース化プロジェクトで大きな役割を果たすことが多いようである^[22]。それに対して当館には、多くの国内の美術館同様、専門職のレジストラが配置されておらず、本プロジェクトの担当は学芸課情報資料室員が務めた。美術館スタッフが各自、データベースを自作していたときには誰もが自由にデータ操作をすることができたが、本格的な情報管理システムに移行した環境では、情報管理に通じたスタッフがシステムやデータのメンテナンスを調整する必要がある。その一方で、収蔵作品自体の管理は、絵画・彫刻室など作品ジャンル別に配属されたキュレーターの職務である。

当館の場合、所在データの記録に関しては、作品の管理に直接関与しているキュレーターが分担し、データの入力作業も行うことになった。このため、所在データのシステム入力には、簡単な研修によって習得できるようなインターフェイスを用意した。このほか、貸出・修復・展示など、さまざまな情報をシステムが包括的に扱うことに比例して、館内の各方面の部門やスタッフの参画がますます必要になってくるであろう。徐々にではあるが、入力作業体制や連絡体制など、新しいシステムを基盤とした業務フローを試行錯誤しているところである。

6. ウェブサイトへの公開

以上のような経緯を経て、2007年度にコレクション・マネジメント・システムの情報をウェブサイト配信する機能を開発し、2008年3月に公開を開始した^[23]。データベース・サーバー機器とは別にインターネット公開用のサーバーを1台追加し、後者のインターネット公開用サーバーに対して前者のデータベース・サーバーから、館内ネットワーク経由でウェブサイト公開するデータを1日に1回転送する。情報の「公開」「非公開」の区分は、作品データおよび画像データのそれぞれについて設定することが可能である。

当館は2007年6月にウェブサイトを更新して以降、収蔵作品に関して「常設展」「所蔵作品紹介」「所蔵作品検索」の3つのプログラムを提供しているが、このうち「常設展」と「所蔵作品検索」の2つが今回新たに公開用サーバーからの情報配信に切り替わったものである。後者の「所蔵作品検索」は検索語を入力して操作する一般的な検索プログラムで、前者の「常設展」が本稿のテーマとなっているものである。その基本的な枠組みは、当館が

その直前まで提供していた「常設展マップ」を踏襲する。概要を次に示す。

「常設展」のトップ画面には常設展示室（本館・新館）の平面図が示される[fig.1]。展示室に振られた番号を押下すると、そこに展示されている作品リストに画面が遷移する[fig.2]。リストは作品の画像および作家名、作品タイトルの日英二ヶ国語で構成される。そのうちの作品1点を選んで押下すると、作品の詳細情報画面に遷移する[fig.3]。詳細画面では下記のような基本データとともに、画像や、展示情報（展示の有無と展示場所）、作品解説、来歴、文献歴（著者名、書名、出版地、出版者、出版年、掲載頁、図版の有無など）が表示される。

クロード・モネ

パリ、1840年—ジヴェルニー、1926年

Claude Monet

Paris, 1840 – Giverny, 1926

舟遊び

On the Boat

制作年	1887年
材質・技法・形状	油彩・カンヴァス
寸法 (cm)	145.5 x 133.5
署名・年記	左下に署名、年記
所蔵経緯	松方コレクション
分類	絵画
所蔵番号	P.1959-0148

表示された作品画像を押下すると、画像拡大画面に遷移する[fig.4]。作品画像の直下に示されている展示情報（例:「展示中 本館2階第5エリア」）を押下すると、その展示室に展示されている作品の一覧に戻る[fig.2]。

作品画像の下に位置する展示情報は、「所蔵作品検索」から作品詳細画面にたどり着いた場合にも、その作品が展示中であれば表示されるものである。展示中の作品のときに展示情報の表示を押下すると、ここでもやはり同じ展示室内の作品一覧を得ることができる。そのときにはある1点の作品情報にアクセスしたことをきっかけに、同じ展示室内に隣り合わせている、新たな作品へと導かれることになる。こうした作品相互を結ぶ情報の連鎖は、美術館のキュレーターが展示のストーリーを組み立てながら作品を厳選し、展示空間を秩序立てていった結果を反映したものである。

このように、コレクション・マネジメント・システムとの連携は、ウェブサイトでは提供している従来からの情報サービスを革新し、ホームページ担当者の作業負担を大幅に削減した。しかも、それまでの「常設展マップ」が作家名とタイトル、クレジット・ラインに限定されていたのに比べて、情報コンテンツは質・量ともに飛躍的に向上したのである。

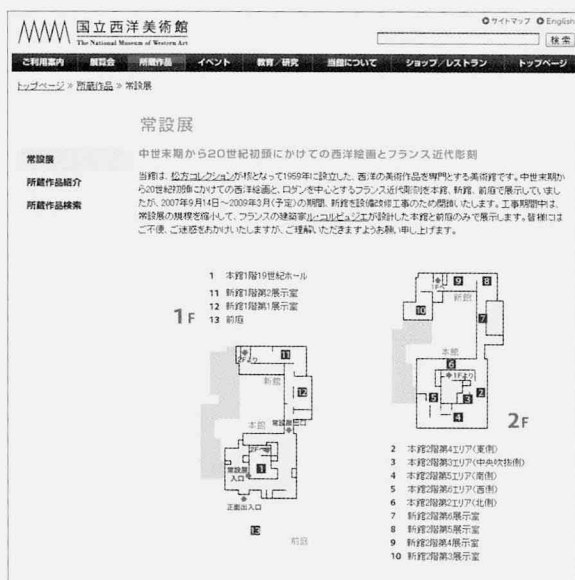


fig.1



fig.2



fig.3



fig.4

結び

今日、美術館内部のための情報管理と、外部の一般利用者のための情報管理とは、境界が曖昧になりつつある。コレクション管理のために蓄積した情報を一般利用者に向けてインターネットに開放することはいまや難しいことではなくなった。しかしたとえインターネットというバーチャルな空間に対峙しようとも、美術館は作品という実体のあるものを収蔵する現実の空間であることに変わりはない。美術館にとって重要なことは、作品鑑賞の場を提供することであって、その鑑賞体験をデジタル画像で代用させることではない。その意味で常設展の情報は、鑑賞の行動を起こすように働きかけるものであり、美術館の情報戦略として有意義なものであると考える。

本稿では、常設展の情報公開を中心に、当館のデータベース化プロジェクトについて概要を示した。従来からニーズの高い常設展の情報サービスをめぐって、情報技術によって手順を効率化し、また提供する内容も実りあるものへと僅かでも進化させることができたのではと考える。そしてその舞台裏にあるのは、コレクション・マネジメントという、美術館にとっては普遍的といえる業務である。時代を先取りするコンテンツ・サービスに挑むだけでなく、

既存の実績ある良質なサービスを洗練させていくこともまた、アート・ドキュメンテーション研究の一つのあり方ではないだろうか。本稿に記した旧システムから新システムへのデータ移行作業の実際など、参考にしていただける館があれば幸いである。

[1] 拙稿、『国立西洋美術館におけるコレクション・マネジメント・システムの構築』、『アート・ドキュメンテーション研究』、no.14、2007、pp.47-55。

[2] Hubertus Kohle, Katja Kwastek. *Computer, Kunst und Kunstgeschichte*. Köln, Deubner Verlag für Kunst, Theorie und Praxis, 2003, p.28.

[3] 機関の枠組みを越えたサービスの事例として、文化庁が2004年に立ち上げた文化遺産オンライン試験公開版がある。http://bunka.nii.ac.jp 以下、URLの表示は2008年3月4日現在、アクセスしたものである。

[4] 海外では、例えばナショナル・ギャラリー（ワシントン）のウェブサイトで常設展示の情報が公開されており、大いに示唆に富むものとなっている。http://www.nga.gov/

[5] International Guidelines for Museum Object Information: The CIDOC Information Categories. http://www.willpowerinfo.myby.co.uk/cidoc/guide/; ICOM CIDOC編、鯨井秀伸編訳、『文化遺産情報のData ModelとCRM』、東京、勉誠出版、2003、pp.41-43。

[6] SPECTRUMについては、下記のMDAサイトを参照のこと。
http://www.mda.org.uk/index.htm

[7] Rebecca A. Buck and Jean Allman Gilmore. *The new museum registration methods*. Washington, DC, American Association of Museums, 1998; 日本博物館協会編、『資料取り扱いの手引き』、東京、日本博物館協会、2004、p.12-13。

[8] Elizabeth Orna and Charles Pettitt. *Information management in museums*. 2nd ed. Aldershot, Hants, England; Broomfield, Vt, Gower, 1998, pp.43-45; E. Orna & Ch. Pettitt編、安澤秀一監修、水島英治編訳、『博物館情報学入門』、東京、勉誠出版、2003年、pp.40-42。

[9] Stuart A Holm. *Facts and artefacts: How to document a museum collection*. 2nd ed. Cambridge, mda, 1998, p.25; S. A. ホルム、田窪直規監訳、『博物館ドキュメンテーション入門』、東京、勁草書房、1997、p.80。

[10] 日本写真印刷による美術館向けパッケージソフトウェア。

[11] 「独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システム」は東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館の共同目録である（美術作品の収集を行わない国立新美術館は除く）。ウェブサイトは次の通り。http://search.artmuseums.go.jp/ 下記文献も参照のこと。水谷長志、川口雅子、『独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムの公開について』、『アート・ドキュメンテーション通信』、67号、2005年10月、pp.8-9。

[12] 当館では1990年代半ばに最初の本格的な美術情報システムを構築し、コンピュータによるデータ管理を試みているが、やがてこれに替えて、市販のデータベース・ソフトウェアで使い勝手の良いデータベースを作成し、個別に運用することとなっていた。

[13] 波多野宏之、『デジタルギャラリー：超高精細画像検索表示システム（情報資料に関わる活動報告）』、『国立西洋美術館年報』、no.33、2000、pp.34-39。なおデジタルギャラリーは2006年8月に運用を終了した。

[14] CMYKモードよりも広い色域を持つRGBモードのデータをマスターとして蓄積するのは、印刷やコンピューター・ディスプレイなどのさまざまな出力デバイスに備えるためである。

[15] 『国立西洋美術館名作選』、東京、国立西洋美術館、2006、1998年4月の初版以来、1998年6月、2004年、2006年に増刷されており、その過程で若干の作品の異動がある。作品解説を網羅的に収集するには、全ての版を参照する必要がある。

[16] 新館2階版画素描展示室で行う当館所蔵の版画・素描の展示では、会場で棒目録を配布する。例えば2005年3月から5月にかけて開催した「マックス・クリンガー版画展：『イヴと未来』《ある生涯》《ある愛》」では、棒目録に各場面の解説が掲載された。

[17] 当館がこれまで刊行してきた総目録は次の通りである。『国立西洋美術館総目録』、東京、国立西洋美術館、1961; 『国立西洋美術館総目録絵画編』、東京、国立西洋美術館、1979; 『国立西洋美術館新収蔵絵画目録 昭和54年-平成元年』、東京、国立西洋美術館、1990; 『国立西洋美術館所蔵作品カタログ 絵画・彫刻』、東京、国立西洋美術館、1997; 『国立西洋美術館所蔵品カタログ：絵画・彫刻・工芸』、東京、国立西洋美術館、2003（以上、名作選などは除く）。『国立西洋美術館年報』は1967年に刊行を開始し、2007年3月に通算第40号を発行した。これら当館刊行物のうち、来歴、展覧会歴、文献歴については総目録の1979年版、1990年版と作品受入年度の『年報』に記載がある。

[18] 前年度に続いて、2007年度にも科学研究費研究成果公開促進費を受けることができた。データ登録作業のまとめ役を務めてくれた足立純子氏、作業に従事した研究補助員各氏にお礼を申しあげる。2006（平成18）年度研究補助員：足立純子、袴田紘代、安永麻里絵；2007（平成19）年度研究補助員：上記3名および比戸奈津子、小熊佐智子、井深優子（敬称略）。

[19] 「科学技術情報流通技術基準」(SIST: Standards for Information of Science and Technology)。次のウェブサイト参照のこと。<http://sist-jst.jp/>

[20] 当館の収蔵作品ファイルは、キュレーターの役割を担う研究員(学芸課絵画・彫刻室、版画・素描室など)とライブラリアンの役割を担う研究員(学芸課情報資料室)との協業体制で維持されており、両部門で記事の切り抜きやコピー、仕分け・収納、ファイルの維持・管理などの作業を分担・協力して行っている。

[21] 例えば美術館情報学の研究者ポール・マーティはイリノイ大学スパーロック博物館の事例を報告している。Paul F. Marty. Museum informatics: Sociotechnical information infrastructures in museums. *Bulletin of the American Society for Information Science*. vol. 26, no.3, Feb/Mar 2000. <http://www.asis.org/Bulletin/Mar-00/marty.html>

[22] Allison Siffre Guedalia Kupietzky. *Subject Access to a Multilingual Museum Database*. Westport, Connecticut, Libraries unlimited, 2007, p.37; Paul F. Marty. "Information organization and access". *Museum informatics*, New York, Routledge, 2008, p.80.

[23] 当館ウェブサイトのプルダウンメニュー「所蔵作品」より「常設展」および「所蔵作品検索」。<http://www.nmwa.go.jp>

Masako Kawaguchi

Since 2004, the NMWA has been developing a database for collection management. This article focuses on how the museum has made information about the museum's permanent collection available on the Internet, and reports on the museum's database project overall.

The database project aims to provide support for the collection management process (for example, acquisition, location movement control and cataloguing) through Information and Communication Technology (ICT). Further, the inclusive collection of information on each work in this database, such as provenance, bibliography, and exhibition history, will be available to museum researchers and professionals, thus contributing to advances in art historical study. Records management has been carried out in the areas of registration and documentation since the introduction of computers into the museum organization. The fundamental concept of the current transfer to the digital domain is to advance record management so that it becomes suitable for an information-based society.

In addition to enhancing information management by museum professionals mentioned above, the database project will also make museum information resources available to the general public over the Internet. The database is searchable by artist, title and accession number, and it is noteworthy that the database provides information on which individual works are currently on display in the museum.

The project began in 2004 with a survey of all the databases in each of the museum's departments. While the NMWA collection totals approximately 4,500 objects, a survey of the scattered databases and numbers of art work records indicated that there was no consensus on the actual number of works in the collection. In spite of that state of affairs, all data was transferred from the old systems to the new systems, and by August 2006, the project's basic goal of minimum information on all works in an integrated format was attained. The next step in the project consists of documenting detailed information about each artwork, such as interpretative data on each object and artist, along with provenance, exhibition history, and bibliography for each work. In tandem with integrating the information from all the databases, a new collections management system was developed and introduced in 2005.

In 2007, the NMWA used the new data management system as the basis for making information on works in the Permanent Collection Galleries available to the public via the Internet. Up until that point staff members manually provided information on what was on display in the Permanent Collection Galleries. The Internet provision of this information greatly lightens the burden of work on staff members in this regard. Further, the new system allows the Internet provision of detailed information on works, and images of them, which it had not been possible to provide in earlier systems.

One of the important functions of an art museum is to provide a place for visitors to view and appreciate art works. First hand experience of art works cannot be replaced by digital imagery. The full provision of information on works on display in the Permanent Exhibition Galleries is an effective art museum information strategy that can encourage visitors to come to the museum.